

大学でのeラーニングの推進を願って

京都情報大学院大学 教授 今井 恒雄

はじめに

私は2004年の6月末に株式会社富士通ラーニングメディアの取締役を退任し、同年10月から京都情報大学院大学に勤務しております。株式会社富士通ラーニングメディアでは、従来の集合研修の他に、新たな研修形態としてeラーニングに精力的に取り組んでおりました。新天地である京都情報大学院大学でもeラーニングに対する関心は高く、2005年から新たな取り組みが始まろうとしており、その考え方を紹介いたします。

1. 京都情報大学院大学の取り組み

京都情報大学院大学は日本最初のIT専門職大学院として2004年の4月に開学しました。「応用情報技術研究科 ウェブビジネス技術専攻」を設置し、ウェブ技術とビジネススキルを兼ね備えた人材の育成を目指しています。

設立に際しては、eラーニングを積極的に取り入れることを明記しています。その方針に基づき、eラーニングの形態としては、遠隔地との双方向のライブ講義と、非同期で学ぶeラーニング(パソコンでコンテンツを使って学習する)の2つの形態を取り入れる計画です。現在の多くの大学での状況を踏まえた上で、京都情報大学院大学の取り組みを紹介します。

2. 大学におけるeラーニング

国内の大学がeラーニングに積極的に取り組み始めていることは、最近の各大学の状況から明らかな傾向であり、優良コンテンツの相互利用の仕組み、eラーニングのためのLMS(Learning Management System)の共同開発、海外のコンテンツの日本語化など、前向きな諸活動が精力的に推進されていることは喜ばしいことです。しかしながら、eラーニングで教えることに対して依然として消極的な立場を取る方々が多いことも事実です。eラーニングという新たな形態での教育効果が十分に明らかになっていないこと、コンテンツそのものを作ることになる先生方自身が、これまでの対面講義で使われてきた教材を、インストラクションの観点からeラーニングのコンテンツ化に躊躇していること、著作権処理など、これまで対面講義では不要だったことが必須になったこと、eラーニングを運用するための様々な要員(教授法の確立とそのコンサルタント、コンテンツ作成をサポートする要員、メールやディスカッションをサポートする要員)の確保をど

のようにするかなど、多くの問題点を残したままですが、可能なところから進め、まず多くの実績を挙げていくことが最善の策と考えます。以下、eラーニングの推進に関する本学のビジョンを述べます。

3. 遠隔講義(双方向のライブ講義)

京都情報大学院大学では、外部機関に対して遠隔的に講義を行うことができ、また外部からの講義を受信することができます。

双方向に送受信する講義スタイルであっても、受信側には特別な設備は不要であることが望ましいでしょう。以下では、これら遠隔講義のスタイルを検討します。

3.1 学外との遠隔講義

対象は、国内外の大学やその他の教育機関です。インターネット環境を使用し、ライブで送受信します。

3.2 学内での遠隔講義

京都コンピュータ学院京都駅前校新館に設置された専用スタジオでライブの配信を行います。また、学内の複数の教室でライブ受信します。イントラネットを使い、1M程度の帯域を確保します。

3.3 スタジオ設備および受信側の設備

スタジオには、遠隔講義をリアルで配信できる環境を構築します。入力、配信側・受信側ともに、ビデオカメラおよび音声です。コンテンツには、各種電子データが含まれ、板書も可とします。表示装置としては、プロジェクタなどを用います。まず、講師は教室内の受講生に向かって普通に講義をします。この際の教材は、PPTを主とした電子データとし、板書を使うこともあります。講師の映像、音声、使っているコンテンツを同時配信します。双方向を基本としますが、双方で同等の設備を前提とはしません。

4. 非同期のeラーニング

京都情報大学院大学でライブ配信した講義や、スタジオで収録した講義をコンテンツ化し、非同期のeラーニングシステムを運用します。

4.1 編集設備

簡易な編集機能が必須です。雑音、咳、不明瞭な発音、不適切な言葉、明らかな間違いなどを除き、より良い表現に修正するため、編集機能は必須です。授業コンテンツの章単位の差し替えもあり得ます。

4.2 電子データ編集の要件

現在はPPTによる電子データが中心ですが、それをPDF化した

もの、Flashのデータなど、様々なデータを前提とします。また、電子データのコンテンツの中から、ハイパーリンク機能で、インターネットのホームページにリンクしたコンテンツも多数あります。静止画、動画、音声の貼り付け、リンクもあり得ます。将来の拡張を視野に、柔軟なコンテンツ作成環境の構築が望まれます。

4.3 eラーニングの環境

kcg.eduグループでは、2004年4月から、WebCTを運用しています。この環境を前提にして、効果的なeラーニングの環境を実現します。学習の進捗管理、メンター、チュータの機能等は必須ですが、WebCTの機能と連携して実現させていきます。

eラーニングのクライアントの環境には、特別なソフトを必要としないことを前提とします。但し、現時点で多くのアプリケーションで使用されているフリーソフトは組み込みます。

4.4 利用対象者

学内の学生、学外の利用者、社会人学生、聴講生などを幅広く対象とします。講義以外のコンテンツは、学外向けのホームページに掲載し、広報活動の一環として利用します。

学内の研修(セキュリティの徹底、教授法の研修、学内の様々な運用規定など)に有効利用すること等を考慮します。

4.5 コンテンツ

学内で作成するコンテンツのほかに、導入するシステムで有用と判断されるコンテンツについては、外部のものを利用します。特に、ビ

ジネス関連のコンテンツに関しては、積極的に利用します。

4.6 運用システム

学内のサーバのほかに、ストリーミングのコンテンツを快適に利用する環境を実現するためには、一般のASPサービスを積極的に利用することも考慮に入れます。

おわりに

現在、多くの大学でeラーニングを積極的に推進しようとしていますが、多くの課題も残っていると認識しています。しかし、社会人も含めた教育の機会を増やし、グローバルな競争社会で勝てる有能な人材を育成するには、eラーニングが一つの有力な手段になるのは間違いないと思います。

このような環境の中で、京都情報大学院大学が、今後も主導的な役割を果たしていくように、各位の積極的な活動に期待し、私自身も微力ながら推進活動に貢献したいと願っております。

今井 恒雄 Tsuneo Imai

京都大学工学部卒、同大学院工学研究科修士課程修了(数理工学専攻)。工学修士。富士通株式会社システム本部主席部長、株式会社富士通ラーニングメディア取締役を経て、現在、京都情報大学院大学教授、日本e-learning学会副会長。